今市の二宮金次郎の足跡を尋ねて

― 報徳文庫、二宮堀、そして狐塚家の文書 ―

「近代社会の成立」研究プロジェクト
（代表　後藤　伸）
萩原富夫

はじめに

「近代社会の成立」研究プロジェクトでは、月一回一冊のインターバルで、「近代社会」に関係する内外の基本文献を取り上げ、輪番制の報告に基づき、討議方式で研究を進めている。その一環としてフィールドワークも行い、今年9月5日、6日の両日、二宮金次郎終焉の地、現在の日光市今市に行った。その主な目的は、地域に現存し機能し続ける「二宮堀」の視察を中心に、二宮神社の一角にある「報徳文庫」、「書簡や幕府からの文書」、轟村の庄屋狐塚家に残されている金次郎関係の資料等の閲覧と情報聴取である。このフィールドワークにおいては、日光市文化財専門調査委員の木村浩氏から報徳文庫と各種史料，報徳役所跡、二宮堀、狐塚家の史料について、われわれの創造力を掻きたてずにはおかない懇切丁寧な案内と説明を受けた。以下その内容を順を追って報告したい。

報徳文庫

東武電鉄の下今市駅下車右手徒歩5分程の所に、二宮神社がある。この神社は、明治30年11月、今市各村の世話人と農商務省の品川弥二郎との協力によって設立された。その目的は、農村復興に尽力した二宮金次郎の報徳思想を称え、またその思想をこの地域と周辺に浸透させようとするところにあった。神社には二宮金次郎の墓と、報徳文庫、その他の資料を保管する宝物館がある。

報徳文庫は、明治38年二宮金次郎没後50周年祭に、遠州の報徳思想の信奉者で近代日本産業の先駆者でもある鈴木藤三郎によって寄贈された。鈴木は相馬の二宮家に残された金次郎が関係する“大部の著述”を知り、それを筆生20余人によって、明治39年から41年にかけて筆写し、9,014巻、2,500冊の写本として完成させた。それを236帙に収め、収蔵する石像の土蔵と鳥居とともに寄贈した。以上の全工程の経費は当時のお金で7,000円掛かり、その全てを鈴木が負担したと言われている。この文庫は現在、昭和43年に新築された新報徳文庫二階の桐の書架に納められている。

報徳文庫の主な内容は金次郎が手掛けた個人の家政改善、諸藩の農村と日光神領の復興の仕法書（細心の現場視察に基づく業務遂行の計画書）と実施活動の手続き上の書類、金次郎の著書・手紙・日記や俳句・短歌、その他弟子の文書である。その写本の筆跡は実に美しく楷書で仕上げられている。この文庫の一階には金次郎使用の草鞋、衣類、測量器材、金次郎の関係者から齎された手紙や文書等が多数硝子ケースに収められている。

報徳役所跡

安政2年（1855）に建てられた報徳役所（陣屋）は現在、その跡地に当時の名残として書庫だけが残されている。この書庫も役所の母屋もその役割を終えた時、地域の嘱望家と思われる人々に引き取られ、その間を転々とする。母屋は失われたものの書庫のみが二宮神社に戻され、昭和30年,金次郎没後100年祭の折に、その跡地に移された。その際、元三菱銀行の頭取加藤武男氏の旧宅が報徳今市振興会館として利用されることになり、併せて書庫の右側に、廻村をしながら村人を指導する金次郎像が建てられた。小田原の二宮神社に残されている金次郎の写生に基づいて創られた銅像は、「尊徳の真の人間を考えるにふさわしい彫刻である」と地域の人々に親しまれている。

嘉永6年（1853)、金次郎は日光奉行所手付に任じられた。彼はそれまでに数々の農村復興を手掛け、その成果の手応えを農民の喜びのなかに感じていたため、日光神領の復興は、日本全農村の建て直しの模範になると考えた。そのため、弘化元年（1844）に日光御神領目論見御用に任ぜられた折、直ちに農村建て直しの標準形式「日光御神領仕法雛形」の作成に入り、弟子を総動員し

て、3年後に完成させている。そうした意図を踏まえて、安政2年（1855）金次郎は今市の報徳役所に移ってきた。当時の役所には母屋と長屋そして上記の書庫があり、その他復興に必要な器材（鍬や鎌等）、肥料、馬屋等の置き場があったとおもわれる。母屋には金次郎夫妻、長男弥太郎家族、一部の弟子、長屋にはその他の弟子（多くは藩に属す）が住み、母屋は事務室や客人の接待に利用された。

面白い話がある。役所開設後、当時農機具は貧しい農民には簡単に手に入るものではなかった。そのため役所が買い揃え無料で貸し出しを行い、利用後の成果に対して農民は冥加として感謝のみを納めていた。多くの農民が頻繁に利用し、荒地の開墾や用水路の開鑿をしたため破損した器材は役所が鍛冶屋に出し修理をした。その遣り取り、貸し出し記録や証文が残されている。金次郎は小田原に居る頃から困っている人には無利子でお金を貸して、年賦で変換させ感謝の気持ちだけを頂くということを行っていた。報徳役所でも馬を買うお金や、高利貸しに手を出し窮地に陥った農民に無利子でお金を貸し、それを年賦で返還させていた。こうした貸し出しの貸付記録や証文が仕法書やその他事務文書と共に書庫に収納され、それが報徳文庫に収められた。金次郎の思想に基づく報徳役所の活動は、早くも公共圏的色彩を帯びていたと言えそうである。

二宮堀

今市には用水が100本以上ある。その内33本が報徳役所の関係した「二宮堀」である。われわれは33本の内、木村氏の案内を受けて、金次郎存命の内に作られた「三か村二宮堀」とその後作られた「原宿用水」を視察した。

前者の三か村二宮堀は文化財に指定されている。和泉村、平ヶ崎村、千本木村に跨る、全長3,478間（約6.3キロ）の大工事であった。大谷川から引水し、「百間堤防」（感動する程の美しい石組み）が水門となり、七里村、和泉村を流れ、堂目喜で落水した後、かなり入り組み迂回しながら平ヶ崎村に入り、更に迂回しながら千本木村に流れ、最後は田川に合流するという経路である。

23日間の工事は関係する村から同数の人足と破畑人足、合わせて1,086人が関わり、1日平均63人で進められた。経費は48両2分2朱で報徳役所が全額出捨（支出）したということである。

3か村の畑田成（畑を田圃に変える）に必要な引水は地形的に段差があり、そのために流れが入り組み、迂回するという景観となっている。景観は一望できるものではなく、不案内の山路の廻村を通じて良くもこうした用水が構成できたものだと驚かずにはいられなかった。また江戸末期の測量技術の高さが大いに関心を引いた。

後者の原宿用水は滑川から石見川に幅4尺の用水路を通して更に小百川に引き入れ、そこから原宿までの全長2,267間（約4.1キロ）幅4尺の水路の開削工事である。人足数延べ1,080人で、費用は160両であった。原宿16戸と高柴7戸は元々小百から引水していた。しかし、それでは生活水に間に合わず、難儀していた所に報徳役所がきて改善したという用水であった。

金次郎とその弟子達の幾多の廻村によって齎された二宮堀は、畑の半分以上を田圃に変えたと伝えられる。

狐塚家の史料

金次郎存命中の轟村の名主である五右衛門とその後の狐塚家の人々は、金次郎や報徳役所、その後の報徳思想、更に轟村に関係する資料を残した。それをその末裔と現在の当主狐塚昭子氏が大切に保管され、その膨大で貴重な資料の内の数点を閲覧させて頂いた。

狐塚昭子氏は二宮弥太郎が狐塚五郎次にミツという嫁の世話をした関係もあり、二宮家に縁の深い人である。残された資料は、御蔵造りの頑丈な建物のなかに設けられた、資料保存用の引き出し型書架に、資料分類に基づいて収納されていた。その書架の上に部厚い保存資料の目録が冊子体で作られ、置かれていた。

われわれが閲覧させて頂いた資料は、地図帳と3点の巻物である。その巻物3点は品川弥次郎の筆になるものである。農商務省にいた品川弥次郎は「報徳思想に深く傾倒し、報徳社運動を理解して積極的に援助し、農会などの組織活動にそれをとり入れようとしていた」。明治25年の二宮神社建設認可の折、弥次郎は積極的に支援し、狐塚五郎次も神社建設認可の発起人の一人としてその運動に深く関っている。そうした関係から、たまたま弥次郎が狐塚家に逗留した折に、五郎次から金次郎の人となりを聴いて、その印象を書に認めたもので

あった。それは草書体で美しく書かれている。

一方、地図帳は今市全域の景観を彩色で描いたものである。廻村を重ねた報徳役所で、用水開削の計画図として利用されたものと思われた。

まとめ:　今市の金次郎

二宮金次郎の社会活動の生涯は大きく3つの時期に分けられる。第一期は、天明から文政年間、酒匂川の氾濫で極貧のなか十代で父母を失い、親戚の食客となるものの二十代で自立し、小田原城下で中間をしながら学問に志し、斗升の改革や負債を抱えた家老家の立て直しをした時期。第二期は、小田原城主大久保忠真に見出され、その親戚下野桜町宇津氏所領の復興を始め、その周辺地域で、天明に続く天保年間の大飢饉によって荒廃した諸藩の農村復興を行った時期。第三期は、幕臣に登用され、利根川分水路見分目論見御用を行った後、大生郷村から東郷管内復興を手がけ、人生最後の3年間を今市で過ごし、「日光神領」89か村の復興に全精力を振り絞り没した時期となる。

ここでは、第三期、金次郎が今市に入り具体的な活動を行ったその足跡を理解することがまとめの内容となる。われわれは案内を受ける道々で、木村氏への幾つかの質問の中で、「金次郎を一言で表現すればどんな言葉になりますか」と尋ねてみた。すると即座に木村氏は「徹底した現場主義の人」と答えられた。その現場主義の足跡が今に残る広範囲に亘る「二宮堀」の存在と理解した。その存在が金次郎の思考と行動を表現する重要な事柄と考えた。その場合、金次郎が実際に行った日光神領89か村の実態把握の行動、すなわち、徹底した「廻村」の実行が現場主義を表わし、二宮堀へと繋がると思われた。

廻村とは、金次郎が手掛けた荒廃極難農村の復興のために最初に行う作業である。復興の対象地域の地形、道路や橋の現状、河川の状態や位置、田畑や民家の現状とその住民の生活状態を詳細に把握し、改善とその方法の可能性を探り出すまで何度でも廻村が続けられた。

神領以前に手掛けた数多くの農村復興で取ってきた核に置かれていたのは、人間の“生きる”という心の存在であった。どんなに荒廃し極貧の農村のなかに置かれていても、金次郎には生に対する意識を失わないで地道に農事に勤しむ人間は必ず存在すると信じられている。改善の仕事で最初に行う事柄は、今市

でも出精奇特人の選出である。これは極貧のなかでも誠実に暮し、他者に貢献する農民を全村民が選び、金次郎が具体的に鍬一枚とか鎌一丁、些少のお金で表彰する、当時としては珍しい活動である。同時に、飢饉や災害のために負債を抱えてしまった農民、そして子供や伴侶を失った老人のような窮民の救済が行われる。再生可能な小さな可能性のある農民に対し、その者に目や耳を傾け、生きた息を吹きかけ、その心を育み、村人全員が認める改善の機動力的存在として育てていた。誤解や嫉妬を招きそうなことでも忍耐強く行うことで、極貧のなかで希薄化していく隣人同士の互恵的存在を強く覚醒させてもいた。こうした「心田」を掘り起こすことで、金次郎特有の「徳を持って徳に報いる」方法が今市における報徳運動を引き起し、その思想が民衆を生きられる世界へと導いた。疲弊した人も自然もその内部には必ず徳（潜在性）を秘めている。そのことに気づき、その徳を、徳をもって掘り起こすことによって徳に報われたのであった。

金次郎の復興の仕事は必ず「仕法」（現場視察に基づく業務遂行の計画書）に基づいて行われた。上述したように、弘化3年（1846）に,金次郎は「日光御神領仕法雛形」64巻を幕府に提出していた。そのため嘉永6年（1853）日光に入ると即日光神領の廻村が始められた。その年の7月、8月の2ヶ月で74か村の検分を行った。その初日、既に病に冒されている身体で、奉行所が用意した駕籠をも避け、山路の悪路を20キロ歩いたという記録がある。

現場を歩きながら金次郎の目に入ってくる寒冷の地、畑の多い荒廃の進む荒涼とした風景に対して、金次郎の意識の志向性と感覚予見が鋭く働いた。大谷川から田川への三か村二宮堀は複雑な段差をもつ地形のなかに開かれた。開鑿しようとする用水にそって隣接する雑木林（未開墾地）や荒地を田畑に、杉や桧の植林に再開発する可能性、用水より高い畑を掘り下げて田圃にし、その土を低い田畑に移し水平に水を引く可能性、そして用水を迂回させることによって難所を避け、広く平等に行き渡らせる可能性等々を開いたのであった。

用水が欲しくても貧しい農民にはとても出来ない事業、それを農民に寄り添う金次郎が“報徳の心”と共に齎した。現代に力強く生き、社会的基盤として機能する今市の「二宮堀」は、豊かな水を湛え、浪々と流れ、永遠の生命の源泉、農業の存在性を今に伝えるかのように見えた。その周辺に広がる、青々と輝く

「畑田成」、鬱蒼と茂る巨木化した杉や桧の森が、当時の農民による農民のための生産力の大幅な増強を推測させた。

参考文献

今市市史編さん委員会編『いまいち市史通史編・別編Ⅰ』1980年
二宮康裕著『二宮金次郎正伝』モラロジー研究所　2010年